

## 設立の思い出と今後への期待

元専務理事 小林 博之

二月十日、私の病室に突然、お見舞いを兼ねて訪れたのは松岡理事だった。

実は私は昨年10月、左腎臓ガンの宣告を受けて、現在療養中である。

松岡氏曰く、「協会も今年で四十周年を迎えます。については、二～三の方に思い出の記を書いてほしいと思います。」と原稿を依頼された。

元気な時はよく駄文を書いたけれど、今は書く気力も衰え、筆にも力が入らなくなった。しかし、四十周年と聞いて、よし書いておこうと決心した。良かったこと、悪かったことなど懐かしく、次から次へと頭をよぎる。

松岡氏が協会に就職を希望してきた頃の事。協会設立3～4年の頃、当時前理事長の高島先生が、協会の一部門にR Iセンター（環境放射能測定関係のセンター）を置きたいとの願望からその先兵として応募した訳で、単なる分析機関に九大から応募するとは、驚きであった。その時、九大2名（女性1名）、福大1名、福教大1名、鹿児島大（女性）1名を採用した。

松岡氏は、色々事情もあって若い時から苦労した経歴もあり、これが後に仕事の上で大きな糧になったと思われる。いずれにしても九州環境管理協会の技術部門を背負って立ってくれている。

次に協会に関して思い浮かぶことの第一は私の就職（転職）であった。きっかけは、当時協会の副理事長であった細川巖先生との係わりであった。係わ

りの中で、表と裏、功罪入り交ってとめどもなく浮かんでくるが、これは後日にまわすとして、どうしても書いておかねばならぬことは、元某炭鉱会社の社長をしておられた「永島氏」のことである。

当時福岡県の知事故亀井氏や地元財界の主でもあった九電の社長故永倉氏とも、電話一本で話が出来た人で、地元政財界を表裡一体で動かされた人物でもあった。

永島氏が当協会に肩入れして下さったのは、以前、竹下健次郎先生に炭鉱のことでお世話になったということをお話しておられた。そして毎日のように私を呼びつけられて、昨日までの報告を聴かれ意見を述べられた。その中には、こんなことは世の中に通じるのかということも多々あった。

そんな或る日、私に怒りを込めて重要な発言をされた。

「小林君！いつか、竹下先生、細川先生によく言っておきなさい！おれは君の明日の糧になるために言っておく」と。それはとても大事なことであった。

一、事業の目的などは時代に合っていく。まともな経営をすれば、この仕事は必ず大きくなる筈だ。

二、一つの事業をやるのに、今の竹下先生、細川先生のように、今日は会議がある、午後は打ち合せがある、とか言って事業に専念せず、片手間にやるのはとんでもない！！大学の仕事と事業を二股かけてやるようではダメだ。

---

小林博之元専務理事は平成23年4月8日逝去されました(享年79歳)。本稿はご生前の2月に執筆いただいたものです。氏は当協会の草創期から25年間にわたって事務局長や専務理事として経営の陣頭に立たれ、当協会発展のために大きな貢献をされました。ご冥福をお祈り申し上げます。

この事をお二人に言うておいて欲しい。  
以上二つの言葉は長く私の心に残った。

そのあと二人と永島氏は事ある毎に衝突する。その時は、九電の永倉社長に仲介に入ってもらい断裂は廻避された。私は常に三者に立ち合ったので良く憶えている。

永倉氏曰く、  
「この事業は、先生方二人でやるには無理がある。財界の有力な一人、永島氏の力が是非必要だ。」

このあと、当事者三人と和解の会食をして一つの山を越した。

それからというものは、永島氏は、(財)日本モーターボート競走会会長笹川良平氏に設立寄付金などを申請して補助金を獲得してもらい、協会の環境放射能研究室を創ってもらった。協会の設立運営について、これ程貢献して下さった人はいなかった。財団法人九州環境管理協会の誕生である。

次に思い浮かぶのは、協会が大きく伸びる基礎を築いた水俣の公害防止事業である。水俣湾をメッシュに区切って水銀汚染の拡散状況を監視するモニタリング作業である。当協会は水俣に宿舍と分析施設を建設し、人材を派遣して水銀その他の測定を行なった。ポイント毎に一定の時間を定めて回収にまわるのは、株式会社パスコのボートであった。

この間色々な障害もあった。主な障害は行政の縦割り体制そのものであった。大体、熊本県下の仕事であるのに、福岡県下の調査機関が行うのはおかしいというのである。竹下副理事長と私は、当時の亀井福岡県知事に会うなど県の上層部と面談したりして、この業務と当協会の協力体制の必要性を説得して歩いた。

競争の激しい環境分析業務は、今こそ四苦八苦しているが、当時はまだやっと新しい業務として出発したばかりの先駆けであった。

考えてみれば当協会は、九大を核とした学者の指導陣とその道専門の方々によって仕事に結びつけていただいて経営の基盤を築き、一方、日夜環境分析や環境影響評価・解析をはじめとした職員の個々の努力が大きいのである。この二者が相まってこそ一つの成果ができるのである。

永島氏が言われたように、根っからの事業家はいなくて半官半民のような財団法人である。長く業界に生き残り、発展していくためには、愛社精神と仕事への創意工夫が求められるのではないかと思っている。

皆様のご健康とご活躍を祈っています。

二月二十二日 病床にて 七十九才



故 小林博之氏退職記念植樹の花水木